

There 構文再考

— その機能と意味上の主語に関する留意点 —

Reconsidering the *there* construction : Notes on related function and post-verbal NPs

山田 七 恵

Nanae YAMADA

Abstract

The *there* construction or *there* sentence is one of the most common English expressions for presenting or introducing things to the context or discourse. This presentational function requires its subject (i.e., the post-verbal NP) to have some sort of new information; hence, NPs with definite expression or identifiable referents are generally prohibited (a limitation known as the definiteness restriction or definiteness effect). There are, however, various cases in which definite post-verbal NPs are appropriately licensed in such constructions. Here, such cases are discussed to support analysis of conditions in which definite post-verbal NPs are acceptable, with respect to the kind of information that these NPs carry and the functions of determiners. This is expected to help clarify basic and important points in teaching the construction more effectively to English learners.

Keywords : *there construction, new information, post-verbal NPs, definiteness restriction*

I. はじめに

- (1) a. ?A book is on the table.
b. There is a book on the table.

(加藤 2001 : 219)

(1b) のように be 動詞を用いた存在を表わす *there* 構文は、中学校・高等学校で教授される文法事項の一つであるが、これまでその教授内容は 1) この構文の主語及び動詞の一致 (agreement) の確認, 2) この構文の文型の判別, の 2 点に限定される傾向が強く, 教育現場において構文の機能や意味上の主語に課せられる制約にまで説明が及ぶことは稀であった。そのため, 多くの学習者は (1a) が不自然な文であるという事実に気づきにくく, (1a) と (1b) の差異も判別が困難になっていると考えられる。そこで本稿では, 言語事実及びこれまでの英語学分野における主な議論を整理し, これまで教室であまり着目されてこなかった *there* 構文における意味上の主語に関する留意点を指摘する¹⁾。構成は以下の通りである。II 節ではまず本構

文の機能・分類・制約を概観し, その一般的特性を明らかにする。III 節では例文を検討しながら, 意味上の主語が定名詞句である 3 つのケースについて説明し, その上で IV 節に留意点をまとめる。

II. There 構文の機能・分類・制約

まずは *there* 構文の機能について確認する。(2) は (1) の再録である。

- (2) a. ?A book is on the table.
b. There is a book on the table.

(加藤 2001 : 219)

(2a) が (2b) に比べて不自然であるのは, この文の情報構造から説明することができる。通例談話は「旧情報から新情報へ」という順で情報が配列され, 「既知のものから未知のものへ」という構造をとるのが自然である。以下 (3) の例において (a) と (b) ではどちらが答えとして自然だろうか。

- (3) When did John come home?

- a. He came home yesterday.
- b. Yesterday he came home.

(加藤 2001 : 215)

加藤 (2001 : 215) が説明しているように, (3a) も (3b) も文法的に間違っているわけではないが, (3b) よりも (3a) の方が自然に感じられる. 質問者にとって「ジョンが帰宅した」ことは既知のこと (=旧情報) であり, この質問は「いつ帰宅したのか」という未知のこと (=新情報) を求めるものであるから, 「旧→新」の流れに沿った (3a) の方が適切になるのである.

There 構文においても「既知の情報 (旧情報) から未知の情報 (新情報) へ」という配列の原則が守られている. (2a) も (2b) も「テーブルの上に一冊の本がある」という意味であるが, (2a) が不自然なのは, 通例旧情報が置かれる文頭の位置に新情報を持つ名詞句 *a book* が唐突に現れているからである. これに対し (2b) は, *there* が文頭に置かれることで, 新情報が文頭から始まる唐突さを避けている. このように *there* 構文は新たな情報を後ろにまわし, 談話においてあるものの存在や出現を新情報として提示するという機能を持つ (加藤 (2001 : 219)).

またこの情報構造との関連で, *there* 構文に課せられる制約の1つである, 「意味上の主語は不定名詞句に限られる」ことも説明ができる.

- (4) a. There is a dog in the room.
- b. *There is the dog in the room.

(中村・金子 2002 : 87)

(4b) が適切でないのは, 定冠詞を伴った意味上の主語 *the dog* が特定のものと解釈されるからである. *There* 構文の機能は新情報を提示することであるため, 動詞の後ろに現れる名詞句 (=意味上の主語)²⁾ は, 聞き手がその指示対象の特定ができない, 新しい情報を持つ不定名詞句であることが一般的である. したがって話し手と聞き手の間で既に特定されている対象を提示することはできない. この制約は定性制約 (definiteness restriction) または定性効果 (definiteness effect) として知られている (Milsark (1974), Safir (1985), Lumsden (1988), その他). 定性制約についてはIII節で詳しく見る.

次に, *there* 構文は用いられる動詞の種類によって大きく以下のように分類できる.

- (5) *be* 動詞を用いた *there* 構文
 - a. There is a Santa clause.
 - b. There is a fly in the mustard.
- (6) 一般動詞を用いた *there* 構文
 - a. There arose many trivial objections during the meeting. (動詞句内 *there* 構文)
 - b. Suddenly there ran out of the bushes a grizzly bear. (動詞句外 *there* 構文, あるいは提示の *there* 構文) (中村・金子 2002 : 81-82)

(6a) と (6b) では意味上の主語の生じる位置が異なっている. (6a) では動詞の直後に意味上の主語があるが (There+V+NP+XP), (6b) では文末にきている (There+V+XP+NP). (6a) は動詞句内 (inside verbal) *there* 構文, (6b) は動詞句外 (outside verbal) *there* 構文と呼ばれ, Milsark (1974), Coopmans (1989) や Rochemont & Culicover (1990) などは, その談話内の機能に着目して, (6b) の *there* 構文を提示の *there* 構文 (presentational *there* sentence) と呼んでいる (鈴木・中島 (2001 : 91)).

上記で *there* 構文の意味上の主語は不定名詞句に限られるという定性制約について見たが, もう1つの制約として, 共起する動詞に関する制約が挙げられる. どのような一般動詞がこの構文に用いられるのか, これまでにも多くの議論がなされ, (6a) と (6b) では共起できる動詞の種類に違いがあることも主張されている. 一般に (6a) の動詞句内 *there* 構文には, 存在・出現を表わす自動詞 (非対格動詞) が現れるのに対し, (6b) の動詞句外 *there* 構文ではこのような自動詞の他に, 非能格動詞 (= (7))・他動詞 (= (8)) も生じることができ (中村・金子 (2002 : 89))³⁾.

- (7) a. There lurched into the room an old man.
- b. *There lurched an old man into the room.
- c. There swam towards me someone carrying a harpoon.
- d. *There swam someone carting a harpoon towards me. (鈴木・中島 2001 : 91-92)
- (8) There entered the room a tall dark stranger. (中村・金子 2002 : 90)

久野・高見 (2013) は, 非対格・非能格などの動詞の区別を用いずに, どのような一般動詞がこの構文と

共起できるかを説明するため、there 構文の機能的制約として (9) を提案している。

(9) There 構文に課せられる機能的制約

There 構文は、意味上の主語の左側の要素が、話し手(または話し手が自分の視点を置いている登場人物)にとって観察可能な存在、非存在、出現、非出現、あるいは消滅を表わすと解釈される場合にのみ、適格となる。(久野・高見 2013: 162)

紙数の都合上、ここでは「出現」を表わす場合のみを考察する。この機能的制約に基づいた場合、上記(7)の例文はどのように説明できるだろうか。(7)において、「意味上の主語の左側の要素」は以下の太字・斜字の部分である。

- (10) a. ***There lurched into the room*** [an old man].
b. ****There lurched*** [an old man] into the room.
c. ***There swam towards me*** [someone carrying a harpoon].
d. ****There swam*** [someone carrying a harpoon] towards me.

(鈴木・中島 2001: 91-92)

(10a) が適格で (10b) が不適格となるのは、動詞 *lurch* の解釈上の整合性・不整合性から来ている。*Lurch* は「よろめく」「急に傾く」などの意味であるが、(10a) では「よろめきながら部屋に入ってきた」、と話し手の前に新たに現れた「出現」と解釈できるので *there* 構文と共起できるのに対し、(10b) では「よろめいた」という一瞬の行為としか解釈することができず、*there* 構文とは整合しない。同様に (10c) も新たな登場人物が「私のところに泳いでやってきた」と「出現」として解釈できるが、(10d) は「泳いだ」という行為としか解釈できない。このように久野・高見 (2013) は、意味上の主語が談話に入ってくる前の段階で、存在・非存在、出現・非出現あるいは消滅という解釈の可否を判断基準としている(詳細は久野・高見 (2013: 141-163))。

以上、*there* 構文に備わっている談話上の機能・分類・制約について確認した。次節では定性制約の観点から、意味上の主語が定名詞句になる場合を考察する。

III. 意味上の主語が定名詞句になる場合

There 構文が談話に新しい情報を提示する機能を持つため、意味上の主語が特定できるものであってはならないという定性制約については前節で見た。「定性」とは、指示対象が何なのか、明らかか否かに関わる文法概念であり、定性を伴う表現は、代表的な限定詞 *the* を伴う名詞句 (= (11) = (4) の再録) のほか、*this/that* 等の指示形容詞や所有格表現を伴う名詞句、固有名詞、人称代名詞、指示代名詞が含まれる (= (12))⁴⁾。

- (11) a. *There is a dog in the room.*
b. **There is the dog in the room.*
(12) a. **There are those dogs in the room.*
b. **There is John's dog in the room.*
c. **There is John/he/him/that in the room.*
(中村・金子 2002: 87)

しかし意味上の主語が定性表現となる例は決して珍しくない。江川 (1991) は次の例を挙げている。

- (13) A: *Is there anybody in the office?*
B: *Yes, there's the boss/Bill.*
(江川 1991: 196)

このように、定名詞句が意味上の主語となる場合、それはどのような条件下で適格となるのだろうか。

ここでも、意味上の主語が担う情報の性質(新旧)に着目する必要がある。江川 (1991: 195-196) も説明しているように、重要なのは、意味上の主語が形式の上では定冠詞や固有名詞などの定性表現であったとしても、それが相手にとって新情報であれば不適格とはならないという点である。(13) では、「オフィスにはまだ誰がいるのか」という A の質問に対して、B が「上司がいます/*Bill* がいます」と答えている。意味上の主語 *the boss, Bill* はどちらも定性表現であるが、A にとっては新しい情報である。質問している時点で A はオフィスに誰かがいるかどうかすら知らないからである⁵⁾。

定性表現となっている名詞句が新情報を担う用例を、Birner and Ward (1998) は詳細に分析し、5つのパターンに分類している。以下ではその分類に基づき、話し言葉・書き言葉における実際の用例を、定冠

詞 the・指示形容詞の this の用法と合わせて、3つのケースに分けて考察してみる⁶⁾。

①意味上の主語が後続の言語表現によって限定される場合：第1のケースとして、意味上の主語が先行する指示対象を持たず定冠詞の the と一緒に現れる場合がある。(16), (17)において、意味上の主語である *the risk*, *the saying* は、初出の新情報であると考えられる⁷⁾。

(16) Although Prime Minister Shinzo Abe is eager to conclude the TPP talks as soon as possible, an early conclusion should not become Japan's goal. *There is the risk that trying to hurry a deal will result in sacrificing important national interests.*

(17) The law does help, as the courts are not wholly unsympathetic toward workers. However litigation is costly and time-consuming and again, foreign teachers are uniquely disadvantaged in both respects. *In Japan there is the saying that "The nail that sticks up gets hammered in," adding an element of shame to standing up for yourself.* This hampers the prospects for industrial action in general in Japan, and for a society where uniformity and complacency are considered virtues, the idea that foreign workers should be entitled to "special" privileges is perhaps asking too much. [The Japan Times]

このように、先行する指示対象が書かれていなくとも定名詞句が文章中に現れるのは決して there 構文に限ったことではない。例えば、記事の見出し (18) において、定名詞句が現れても何ら不自然ではない⁸⁾。

(18) It's hard to avoid *the conclusion* that La Liga's title race is over [the Guardian. com]

(16), (17), (18)の名詞句がなぜ新情報なのにも関わらず定名詞句なのかは、定冠詞 the の用法により説明ができる。既によく知られているように、ある名詞句が談話に用いられるとき、初出の際は不定冠詞を付け、その後は定冠詞をつける、というのが一般的である。

(19) John ordered *a book* and *the book* has just arrived. (池内 1985 : 43)

(19)のように、既に述べられたものに言及するのは定冠詞の前方照応の用法である。これに対し、(16), (17), (18)の定冠詞の用法は後方照応の用法だと説明できる。定名詞句の後ろの同格の that 節の限定のために、先行する指示対象なしに定性を示す the がついているのである。この他にも、後続する関係節によって名詞句が限定される場合などもある(詳しくは池内 (1985 : 52-59))。したがって (16), (17) のように意味上の主語が後続する修飾語句によって限定されている場合、定冠詞 the の使用は適切と判断され、かつ文脈上新しい情報を持っているため何ら問題はないことになる。

②意味上の主語が共有知識内のものである場合：第2のケースとしては、意味上の主語が談話者の共有知識内で限定可能となっている場合である。

(20) A : What's in the back room?
B : *There's the bullet cartridge, the extension cord, and several old 45's.* (中村・金子 2002 : 82)

(20)でAは「何が奥の部屋にあるのか」と訊ねている。それに対しBは、「奥の部屋にあるもの」を挙げている。意味上の主語は定性表現を伴っているが、Bにとっては未知の内容であるので新情報である。このように該当する事物のリスト内の一部が挙げられていると解釈できる文をリスト文 (Milsark (1974)) という。(20)で定冠詞 the は、発話の状況から使用されている。これはAとBが奥の部屋に関することを話題にしており、共有する知識内のものを挙げているからである。言語化された表現に頼ることなく、発話の場面・状況から the+指示物が同定されるこのような用法を、外界照応の用法という。

これとの関連で、次の例はどう説明できるだろうか⁹⁾。

(21) The Japanese apricot—a plant native to China, actually—is one of the longest lived of the flowering fruit trees. It's a symbol of resilience in the face of adversity thanks to its early flowers, delicate promises of spring

that can begin blossoming before New Year's Day. The tree continues to send out white, rose or red flowers on nearly leafless branches, luring bees all through the winter. *And then there is the fruit.* Golf-ball sized orbs begin to appear in spring. They are commonly harvested green and unripe, when the flesh is very sour and laced with cyanide, making it potentially poisonous.

[Los Angeles Times]

意味上の主語 *the fruit* は、初出であるため新情報である。定冠詞がついているのは、明らかに前の文章から限定が可能だからである。前の文章を読むことにより、読み手と書き手の間に共有知識が生じ、その上で梅という植物に関する知識の一部である「実」が引き合いに出されているのであるから（植物には「花」や「実」がつきものである）、定冠詞 *the* の使用は適切となる。この *the* は (20) のように外界照応的ではないが、文脈から派生した間接的な前方照応と考えられる点からも、この用例は正当化されよう¹⁰⁾。

(20), (21) の例が示すように、発話の状況や文脈によって生じる共有知識内のものを *there* 構文で提示するとき、意味上の主語が定性表現を伴うことは適切で、かつそれが発話の状況の中で新しい情報を持っていればよいということになる。

③意味上の主語が不定の *this* を伴っている場合：第3のケースとして、意味上の主語が *this* を伴っている場合を挙げる。(22) は映画の台詞である。

- (22) a. Marlow: What's it called?
 Shakespeare: Romeo and Ethel, the Pirate's Daughter.
 Marlow: What is the story?
 Shakespeare: Well, *there's this pirate*...
 [Shakespeare in Love]
- b. Spike: Come on—open up—this is me—Spikey—I'm in contact with some quite important spiritual vibrations. What's wrong?
 William: Well, okay. *There's this girl*...
 Spike: Aha! I'd been getting a female vibe. Good. Speak on, dear friend.

[Notting Hill]

(22a) は映画「恋に落ちたシェイクスピア」の trailer 中の台詞で、次の芝居はどんな内容なのかという劇作家マーロウの問いに対するシェイクスピアの台詞である。(22b) は映画「ノッティングヒルの恋人」の台詞で、最近元気がないがどうしたのか、という友人スパイクの言葉に主人公のウィリアムが答えている。意味上の主語である *this pirate*, *this girl* は新しい情報であるが、定性表現である指示形容詞の *this* を伴っている。通例指示形容詞の *this* が用いられる場合、その対象は談話者の見える範囲にあるのが一般的だが、この場面において *pirate* も *girl* も目の前に存在しているわけではない。

見える範囲内に指示物が存在していないのに *this* を付けるというのは、日本人学習者には感覚が掴みにくいかもしれないが、このような *this* は不定の *this* (indefinite *this*) と呼ばれ、不定冠詞に置き換えることが可能である¹¹⁾。物語の生き生きとした感じや相手とその話の中に引き込む役割を持ち、口語で広く用いられる(池内(1985:106))。このような *this* が談話に用いられている場合、話し手はある特定の対象のことを心の中に浮かべていて、聞き手はそのこと(つまり、目の前にその指示物はないけれど、話し手の心の中にはその指示物が浮かんでいて、それを指して *this* と発話していること)を認識する必要があるだろう(伊藤(2005:33))。このケースは、上記で見た2つのケースとは違って、指示形容詞の *this* が言語表現や前の文脈から限定されることはなく、これから話し手が談話に新たな情報を導入しようとしていることを、聞き手の方で了解しなければいけない。

以上、書き言葉・話し言葉において新情報を持った意味上の主語が定名詞句として生じるのはどのような場合なのか、学習者が留意すべきと思われるケースを3つ挙げた。これらのケースにおいてはどれも意味上の主語が文脈内で新情報を担っており、かつ定性表現の使用が適切と判断されるものであった。一貫して留意すべきは、意味上の主語が定性表現を伴っているという言語表現形式上の理由のみで *there* 構文においては不適格という判断はできず、それが文脈・状況において新しい情報を導入する役目をしていれば、定性表現として *there* 構文に生じることができるといえることである。

IV. 結 語

結びとして、上記で見た言語事実・先行研究に基づき、there 構文をより十全に学習・教授する際に留意すべき点を以下の5点にまとめる。1) there 構文の機能は、新しい情報を持った意味上の主語を談話に導入することである。2) 1)のため、there 構文の意味上の主語には制約がある(定性制約)。3) 全ての動詞がthere 構文に使用可能というわけではなく、同じ動詞であっても解釈の仕方によっては用いることができない場合がある(久野・高見(2013))。4) 意味上の主語が定性表現を持つ場合でも、それが新しい情報を提示していれば不適格とはならない(Birner and Ward(1998), 江川(2001)ほか)。また、5) 意味上の主語が定性表現を持つ場合、それが新しい情報を持っているかどうかは文脈・状況から判断されるべきであり、定性表現を伴っているからという言語表現形式上の理由に基づいて不適格であると判断すべきではない。特に5)については、there 構文の特性並びにtheなどの定性表現の性質の両面から学習・理解されるべき事項として、今後教授の際に重要な留意点になるものと考えられる。

注

- 1) 本稿は教育の現場で有益だと思われる言語事実・研究成果に目を向けるので、詳述・専門用語の使用を避ける部分も多いことを予め断っておく。
- 2) これ以降 there 構文の動詞の後ろの名詞句(述語後述名詞句)を意味上の主語と呼ぶことにする。
- 3) 非対格動詞(unaccusative verb)と非能格動詞(nergative verb)の区別について、久野・高見(2007: 274)は以下のように説明している(一部抜粋)。

非対格動詞(unaccusative verb)

- (i) 意図を持たずに事象にかかわる対象(または非動作主)を主語にとる自動詞 burn, sink, break など
- (ii) 存在や出現を表わす自動詞 exist, hang, emerge, happen など
- (iii) begin, start, end などのアスペクト動詞

非能格動詞(nergative verb)

- (i) 意図的に事象にかかわる行為者を主語にとる自動詞 talk, walk, jump, skate など
 - (ii) 非意図的な生理現象を表し、経験者を主語にとる自動詞 breathe, sleep, belch, hiccup など
- 4) 通例動詞句外 there 構文は、定性制約を受けない。

- (i) There flew through the window *that shoe* on the table.
 - (ii) Thereupon, there ambled into the room *my neighbor's frog*. (Milsark 1974 : 248)
- 5) Prince (1992) は情報を新と旧の2つだけに区別するのは不十分として、「談話上旧」(Discourse-old)と「談話上新」(Discourse-new), 「聞き手にとって旧」(Hearer-old)と「聞き手にとって新」(Hearer-new)という区別をつけた。
- 6) ここでは Birner and Ward (1998) の分類の中から、筆者が英語学習の上で頻出し、特に有用であると思う3つのパターンを挙げた。またここでは be 動詞を用いた there 構文のみを取り上げた。
- 7) a) 2013. Dec 26. "Proceed with caution on TPP talks," The Japan Times. (2013/9/1) http://www.japantimes.co.jp/opinion/2013/12/26/editorials/proceed-with-caution-on-tpa-talks/#.VAP2Yv1_uWY
- b) Robson, C.C. 2014. Jan 22. "Teachers tread water in eikaiwa limbo," The Japan Times. (2013/9/1) http://www.japantimes.co.jp/community/2014/01/22/voices/teachers-tread-water-in-eikaiwa-limbo/#.VAP4Lv1_uWY
- 8) Low, S. 2012. 13 Feb. "It's hard to avoid the conclusion that La Liga's title race is over," The Guardian. (2013/9/1) <http://www.theguardian.com/football/blog/2012/feb/13/la-liga-real-madrid-barcelona>
- 9) Spurrier, J. 2013. 8 Jan. "Umeboshi, Japanese apricot, Chinese plum: Prized fruit by any name," Los Angeles Times. (2013/9/1) <http://articles.latimes.com/2013/jan/08/news/la-lh-growing-umeboshi-20130108>
- 10) 間接的な前方照応の例として、以下の例が挙げられる。

Fred was discussing *an interesting book* in his class. He is friendly with *the author*. (池内 1985 : 47)

- 定名詞句 *the author* の定冠詞 the は、先行する *an interesting book* によって連想が引き起こされ、話し手と聞き手の知識集合の中に author, pages, content などが納められ、その共有の知識集合内の author だと同定される(池内(1985: 47))。
- 11) 池内(1985: 107)の説明にもあるように、このような不定の this は統語的に完全に不定冠詞の代用になっているわけではない。例として、不定の this は数詞と共にできる。

I was with *this one cop*, he used to sneak up on cars and look in... (池内 1985 : 107)

引用文献

- 1) Birner, B. and G. Ward. (1998) Information Status and Noncanonical Word Order in English, John Benjamins, Amsterdam.
- 2) Coopmans, P. (1989) Where Stylistic and Syntactic Process Meet: Locative Inversion in English, Language 65, p.728-751.
- 3) 江川泰一郎 (2001) 英文法解説 改定三版 金子書房, 東京.
- 4) 池内正幸 (1985) 名詞句の限定表現 大修館書店, 東京.
- 5) 加藤克美 (2001) 情報構造, 英語学入門 安藤貞雄・澤田治美 (編) p.214-236, 開拓社, 東京.
- 6) 久野暉・高見健一 (2013) 謎解きの英文法 省略と倒置くろしお出版, 東京.
- 7) Lumsden, M. (1988) Existential Sentences, Croom Helm, London.
- 8) Milsark, G. L. (1974) Existential Sentences in English, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge.
- 9) 中村捷・金子義明 (2002) There 構文, 英語の主要構文, 中村捷・金子義明 (編) 第9章 p.81-90, 研究社, 東京.
- 10) Prince, E. F. (1992) The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information Status, Thompson, S. and W. Mann (eds.), Discourse Description: Diverse Analyses of a Fundraising Text, p.295-325, John Benjamins, Amsterdam.
- 11) Rochemont, M. S. and P. W. Culicover. (1990) English Focus Constructions and the Theory of Grammar, Cambridge University Press, Cambridge.
- 12) Safir, K. J. (1985) Syntactic Chains, Cambridge University Press, Cambridge.
- 13) 鈴木英一・中島平三 (2001) 存在構文, 最新英語構文辞典』中島平三 (編) p.82-93, 大修館書店, 東京.

(平成26年9月9日受付)
(平成26年11月19日受理)

